
熱砂を越えろ

椀滝 秋乃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

熱砂を越える

【Nコード】

N7973Z

【作者名】

椋滝 秋乃

【あらすじ】

ロボットレース物、っぽいなにか。サークルの部誌に投稿した短編小説。批評や反響があるようなら長編企画にしていこうと思っています。

見渡すばかりの砂の海。金色の世界に影を落とす砂丘は、吹き抜ける風にうねりながら常に形を変えていく。

抜けるような青空と容赦ない太陽が、世界のなべ底を舐めるように熱する。

「あっちー」

砂漠ということを考えればあまりに当然な眩きが、小さなオアシスの隅っこでこぼされる。貴重な水源と共に発展した街の外に、不思議な車両が停まっていた。

一見、砲塔を備えた装甲車だ。履帯を備えた車体も、通常の装甲車に比べれば幾分スモールサイズかもしれない。

ただ、少し近づけばその威容ははつきりとわかる。

二門の砲を両脇に抱えた、全高三メートルを越す砲塔。丸みを帯びたバックパックやフルプレート・アーマーのような装甲で崩れた輪郭の中には、履帯を台座に座り込む人の形が潜んでいた。

その膝の上にあたる場所で、一人の少女が天日干しにされていた。暴力的な炎天下、長袖長ズボンの上にポケットだらけのジャケットを羽織っているのだから、暑いのは当然だ。

首にぶら下げた、顔のほとんどを覆いそうな大きさのゴーグルが風に揺れる。

「とけるー」

「勝手にとけてろ」

不機嫌に低い声を少女にぶつけて、一人の青年が車両前方のハッチから顔を出した。ちょうど大の字になっている彼女の足元あたりにひよっこり生えた機械油の汚れと頬の絆創膏がトレードマークの彼の顔は、まだ二十歳に届いているようには見えない。寝そべった少女は、それよりさらに年下に見えた。

「コックピットにいろよ。ってか、パイロットスーツ着てるんだっ
たら、そんなに暑くないだろうが」

「気分だよ、気分。装甲はガチで熱いんだけどね」

そう言って少女は身を起こすと、日をたっぷり吸った車体に素手で触れる。その指はすぐさま耳たぶへトンボ返り。

青年は眉根一つ動かさず車の上に出て、真黒に染まった作業用の手袋を外した。

「最終調整は終わりだ」

「ありがとっ」

彼女はにつこりと笑うが、彼はなにも返さずに車体から飛びおり、車体の周囲をぐるっと歩きながら説明した。

「水と食料は多めに積んでおいた。重いからって勝手に捨てるなよ」

「もちろん。喉が渴くのもお腹が空くのも嫌いだからね」

「速さで負けるのは？」

「だいっきらい」

彼女も立ちあがると、彼の出てきたハッチのロックを確認してから砂上に下り、キャタピラを覗きこむ。転輪に異常がないか、細かなセルフチェックに気を使うことが、つまらない事故を防ぐことを二人ともよく知っていた。

「食料と水は、コックピットからパージできないようにしておいた」

「だと思っただよ」

一通りチェックを終え、戦車の影に避難する。二人が並ぶと、座高だけでもずいぶん差があることが分かる。それは彼女らの身長が両極端なせいで、実のところ年齢は三つと離れていない。

「あと三十分だね」

少女が時計を覗きこんで無邪気に言う。しかし、彼は無愛想なままだ。

「死ぬなよ。今回のレースは文字通り、生き残りレースだからな」

「わかってるって」

自分が駆る機体の動輪をなでる。これから始まる過酷な競争を勝

ち抜くための脚には最大の配慮がなされている。

「まあ、エンゲージしたらどうなるかわからないけど」

気楽に言い放った瞬間、彼は少女を無言で睨みつけていた。表情の変化がないためなのか、少女も鋭い視線にのせられた迫力に息をのみ、不用意に緩めた頬を引き締める。

「信じるよ。わたしたちは最速だ」

「当然。三基の主質量炉に、補助一基。平均の四倍以上の出力に最高精度の脚回り。スペックは軍用試作機クラスだ」

「その代わり武装は光学砲二つだけになっちゃったけどね」

「お前が乗るんだ。十分だろう？」

にこりもしないうえに小言ばかりの相棒から不意を突いて飛び出す信頼に、少女は薄く頬を染めて鼻の頭を掻いた。

「ありがとう」

小声のそれは、不意に吹き抜けた風にかき消されてしまう。
構わず彼は続けた。

「アサルトモードでもアーマーは外すなよ。コンデンサと冷却装置はほとんど外付けだから」

「げえ、禁止事項多すぎ」

「こんな無茶苦茶な機体壊してみろ。スポンサーが発狂する」

「あー、そういえばお嬢、よく四基も質量炉回してくれたよね」

「世界で一番危険なレース、だからな。クリアできれば世界中に名前が売れる。機体は死んでも持つて帰れ、だとさ」

「死んだらどうやって持ち帰るのさ」

ズリさがった大きな眼鏡がトレードマークの出資者の顔を思い浮かべて、少女は複雑そうな表情を浮かべる。

「もう、二人だけの夢じゃなくなっただね」

「その方が気楽だったか？」

「正直、ね」

そう言っただけで立ち上がると、装甲の影を出してしまった頭に日を浴びる。目を細めて、まだまだ強くなる日差しに目を細めると、隣で腰

を上げた彼が、初めて頬を少しだけ曲げた。そこに含まれたモノは、言葉では語りきれない。でも、彼女にだけはすべてが伝わった。だから、いつもの笑みでもって答えにした。

心なしか彼の口調も穏やかになる。

「ルールは覚えたか？」

「期間は一週間。他のレーサーと戦闘に入るときはエンゲージを宣言すること。撃墜二点、エンゲージを宣言されてから逃げ切れれば一点。で、撃墜されたら失格。もったたスコアは相手に入る、と」「色々抜けてるが、お前にしては上出来だ」

「頭弱くてわるうござんした」

ベーと舌を出して、車体の横に設けられたタラップを軽やかにのぼって見せる。猫のような身のこなしから、全身にしなやかなバネを持つていることが分かった。

「引きこもってやる」

「一週間出てこなくていいぞ」

もう一度あかんべえをして、砲塔の背後にまわった。巨人が背負っているバックパックの装甲に触れると、ガタンツ、とロックの外れる小さな衝撃と共に装甲が展開する。小柄な少女にもぎりぎりの隙間に難なく滑り込み、ハッチを閉める。

半立ちのようなシートに体を固定し、首からぶら提げていた巨大なゴーグルで顔を覆った。

「全システム起動。セルフスキャンは省略なし。質量炉始動、アイドリングとコンデンサに供給開始」

まるで呪文の詠唱のように難しい単語を並べる。よどみなく紡ぎ終わった言葉はマイクを通してコンピュータに伝わり、すべての計器に火が入った。その経過はゴーグルへと投影され、目まぐるしく変わる表示を一つ残らず把握するのは至難だ。それを彼女は苦もなく終わらせる。

「リフレックス・センサー
従反射機覚、オン」

最終的に画面に投影されるのは、車外の映像だった。いくつかレ

ーダーの表示もあるが、主には巨人の頭部に設けられたカメラがとらえた砂漠の風景が映る。

両手に握ったスティックと動かすと、砲が上下に動く。腕部異常なし。

『どこか、おかしいところはあるか？』

「ないよー。セルフモニタも万全。さすが」

『どうも。あと三分だ』

通信に答えつつ目線だけ動かすと、カメラが切り替わり、フロント履帯下のレンズを覗きこむ無愛想が視えた。

彼が腕時計をカメラの前に掲げる。彼愛用のアナログの文字盤は、ディスプレイのはじに表示されているのと同じ時を刻んでいる。

『整備員はそろそろ撤退だ。四日後の補給まで通信すらできなくなるが、言い残すことはあるか？』

「言い残すって……。でも、ちょっと気の利いたことは言って欲しいな」

変わらない語調は頼もしいし、彼の性格も熟知しているから、これはほんのちよつとした遊びだった。彼は少し視線をあげて間を持たせ、それから

『帰ってきたら、結婚でもするか？』

「それはやめて。帰れなくなる気がする」

『冗談はさておき、楽しんでこい。おまえの夢を、な』

「……うん」

通信チャネルが閉じたのを示す表示が時計の上で明滅し、彼は視界から消えた。車外各所のセンサーを使えばその影を追うのは簡単だが、彼女はそれをせずに映像を頭部へと戻した。

ちよつと首を仰角にすると、抜けるような蒼穹が両手を広げていた。目線を検出するインターフェイスも慣れれば便利で、機体の現状を最終確認する。問題なし。

「ん？」

その過程で、機体のメモリーに覚えのないテキストを見つけた。

それを展開する。

そこに記されていたのは、たった一文。

O v e r t h e D e s e r t

知らず、彼女は上唇を湿らせていた。スティックを握る手を緩め、そして力を込めなおす。視界を砂漠に戻して、まっ正面に固定する。

「熱砂を越えろ、ね」

果ての見えない砂だけ、彼女の前には広がっている。そこには、いままで出会ったこともない、そして最高に出会いたかったすべてが詰まっているはずだ。

「言われなくても、越えてやるさ」

喉が鳴る。全身の神経を走り抜ける電流さえつかめそうなほど、心が躍る。

黄金と青の二色で占められたフィールド。そこで自分を待ち構えているすべて、自分がこれから越えていくモノへの、それは不敵な宣戦布告だった。

ディスプレイ中央に、スタートシグナルのランプが表示される。

三秒前。

赤二つ、赤一つ

スタート
青

「ヒッグストライプ・クルージング
可変質量機関・巡航！」

ペダルと音声入力に従って、機関が心強い咆哮をあげた。体を固定していてもわかる加速に心を昂らせ、巨人の影を載せた無限軌道が彼女を舞台へと駆け立てる。

黄金の大地をかき分けて、前へ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7973z/>

熱砂を越えろ

2011年12月25日17時49分発行